

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年7月1日発行

(毎月1回1日発行)

第14巻第7号 通巻157号

7 月号
2019

創刊13周年記念号



乗り継いで春蚕の眠る里にゐる

朝な夕な日の差し込める鳩浮巢

祖の墓の裏に狐の剃刀が

草笛に草笛をもて応へけり

石楠花の花には雨のよく似合ふ

滴りて笥の水の涼しさよ

毛虫焼かねばひとときの狐雨

朔太郎の忌よ山国へ発つ列車

草木瓜が咲く林中の明るさに

夕菅の野は郷愁の捨てどころ

俳書百冊一棚づつのお風入

蜷の道八十にしてためらはず

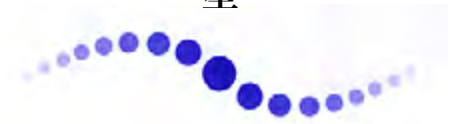
同行二人麦生の里の風の音

同行二人

主宰作品

増成栗人

荒川心星



末黒野

桃咲いて妻の寧けき日なりけり
桃の花午後より日差し濃くなりぬ
雉鳴いて西行の忌を宇陀にゐる
只管打坐蝶来て蝶の去りにけり
簞に雀の騒ぐ利休の忌
初蝶のふはふは父母の墓訪はな
桑解いて里曲に風の生まれけり
末黒野にゐて末黒野の音を聞く

はや影を育てて櫻若葉かな

参道を横切る鉄路夏の蝶

街道を風吹きわたる燕の子

絞商家屋根の鍾馗に夏来る

鴨三羽残ると決めし浮寝かな

みどりの日土をいぢりし手を洗ふ

さざなみは空へひとつばたごの花

落の葉を煮つめ豊かなひとりの夜

櫻若葉



半谷洋子

谷口摩耶

ピアノ

しぐれ煮の浅蜷の旨し古稀迎ふ
新茶汲む母の病を引継いで
弾けぬ手でピアノを磨く緑の夜
生業^{なりはひ}のピアノ手放す聖五月
まつすぐに若葉をまどふポプラかな
ゆふがたのココアをすすり花水木
万緑の彼方へピアノを送り出す
一人しか通れぬ小径薔薇咲けり



鴻 作品抄

風となる末黒芒に火の匂ひ

松田那羅生

保育器のひよこの孵る花の昼

神野未友紀

三歳と八十歳のしやぼん玉

吉清和代

一組の銀器を並べ花の夜

森 祐司

オホーツク零下九度の春がくる

北原沙織

かたかごの花とは人を恋ふる花

鈴木芙美子

身ほとりがモノクロになる花吹雪

山岸明子

春の昼額縁店の木の匂ひ

伊藤 隆

鰻屋に高座をひらく花の夜

深川峰子

花木五倍子瀬音に耳を傾けて

荒井一代

燕来る四分休符のかたちして

石垣真理子

つくしんぼ眠りし吾子の手の中に

中川幸恵

風薫るフランス装の同人誌

三代川朋子

鳥の恋ほやのある木のふくらんで

北村 操

教会のゴスペル桜葉の降る

鈴木 崇

花御堂風軽やかに伸びやかに

藤原明美

入彼岸金龍の舞ふ寺にゐる

守屋吉郎

懸紙に心ばかりと松の花

美濃律子

むらさきの野の花で葺く花御堂

小林和子

花が降るあまたの蝶となりて降る

原 達郎

第十三回「鴻」賞 受賞作品

「鴻」賞を受賞して

佐野久乃

絵手紙に添える言葉探しとして、田中一光先生の俳句講座に入会。それから十八年、これほど長く続けることが出来たのは一光先生、栗人主宰の丁寧なご指導と仙台の句友の皆様のおかげと感謝申し上げます。

「鴻」賞の知らせを受けた時、母の具合が悪く、この喜びを共に分かち合えないことが残念でなりません。俳句は奥が深く、今なお、混迷の中にいます。この度の賞を励みに更なる研鑽を重ね、一歩前進できればと思っております。選考にあられた皆様にご礼申し上げます。



略歴

昭和二十七年 愛知県生まれ

平成十三年 仙台リビング新聞社

俳句講座入会

田中一光氏に師事

「鴻」入会

平成十九年

「鴻」同人

俳人協会会員
宮城県俳句協会会員

伊達の地

佐野久乃

屋久杉の箸と箸置き年迎ふ
緋梅白梅描くとすれば光琳派
島陰に島ありどんと立ち昇る
伊達の地のいぐねの杉よ母の日よ
蓮の花兼志句集の「遊」と「風」
水無月や尼僧にならふ数珠念珠
雨来るか雨の句ひの青蜥蜴

蕎麦干して兜造りの茅の屋根
伊達の地の刈田の空のがらんど
隠し湯に十の効能葛の花
壺の碑を囲む格子も露湿り
政宗のお狩り場跡の掛大根
水牢の跡にこれほど鴨の群
島小春のつぺらぼうな烏賊襖
雪ざんざ和歌三神を祀る宮
一光の忌よ湯豆腐の浮き沈み

第十三回「鴻」新人賞 受賞作品

「鴻」新人賞を受賞して

鈴木 崇

この度は身に余る賞をいただき、有難く思います。驚きとともに喜びを感じております。

「鴻」を紹介していただいたのは、伊藤隆さんでした。まずはメール句会で摩耶編集長からご指導いただきました。メール句会メンバーとの交流で句友を持つ楽しさを得ました。俳句で心の羽を伸ばす面白さを知り、「鴻」で身を入れて続けていこうと思いました。

栗人主宰をはじめ選考いただいた諸先生に感謝申し上げます。これからも自分なりの俳句の姿を求めて精進していきます。



略歴

一九七七年 横須賀市生まれ

二〇一三年 文芸フリーペーパー

「東京ローズ」創刊、同人。

二〇一五年 「鴻」メール句会参加。

二〇一六年 「鴻」入会。

カウンター席 鈴木 崇

メール書き温め直す栗ごはん
朝刊の記事を切り抜く秋徼雨
期日前投票の列そぞろ寒
西口の蕎麦屋のにほひ小六月
二軒目のカウンター席年つまる
鰯酒に火を入れて夜の深くなる
揚げたてのコロッケさくと春めける

レシート裏短冊にして朧
春時雨いつもの路地にいつもの灯
復活祭エスプレッソを少し嘗め
折り畳み傘を鞆に荷風の忌
春の蝶防空壕の口開く
鷺一羽青き山河をほしいまま
金毘羅の五人百姓残暑なほ
半夏生スノードームの雪散らす
玉鬘十帖灯火親しめり

第十三回「鴻」新人賞 受賞作品

ペン胼胝

相川 健

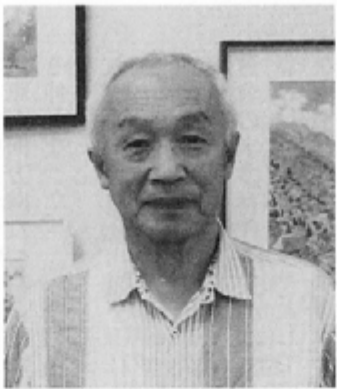
七日粥啜れば瀬音風の音
立春の光ゲのふくるる川面かな
唐橋を渡れば月の朧なる
不揃ひの母の手造り蓬餅
俳諧の道の一つに蜷の道
やはらかな刻の流るる花筏
愛鳥週間ジャングルジムに群がる子

「鴻」新人賞を受賞して

相川 健

この度は新人賞という身に余る賞をいただき恐縮しております。主宰はじめ諸先輩方、句友の皆様に心から御礼申し上げます。

我孫子市の市民俳句講座の終了後、講師の先生に「鴻」を紹介され、「鴻」への投句を始めました。しかし、本格的に俳句と向き合うことが出来たのは「矢切句会」に入会してからです。はるかにレベルの高い方々と直に競い合うことは身の細る思いですが、思い切って決断してよかったと思っております。これからも一層の精進をする所存です。ありがとうございました。



略歴

昭和十九年

山梨県生まれ

平成二十年

我孫子市市民俳句講座受講

平成二十二年

「鴻」入会

平成二十六年

「矢切句会」入会

現在「松戸句会」

蛞蝓のぬうらりくらり雨来るか
少年の小さきペン胼胝青葡萄
ドアノブの螺子穴ゆるむ大暑かな
硯海に墨たつぷりと今朝の秋
鳥渡るあららぎの実のほの甘く
さざ波の光を纏ふ浮寝鳥
鳥ごゑを抱き沼辺の葦枯るる
虫喰ひの跡うつくしき柿落葉
かいつぶり浮き来るまでの静寂かな



羽音集

増成栗人 選



入学の児を真ん中に父母祖父母
松戸 山岸明子

風に乗りもくれん白き鳥となれ
また一つ訃報辛夷は満開に

満開の桜が闇を暗くする
身ほとりがモノクロになる花吹雪

目覚しを大音響に変へて春
会津 中川幸恵

つくしんぼ眠りし吾子の手の中に
あてもなく走る車窓に斑雪山

春夕焼鉄砲玉の児が帰る
菜の花や子らの帽子が見え隠れ

あたたかや一つの鍵を手渡しに
松戸 吉清和代

春の月こころ廓の舟着場
ふらここ漕ぎ古き映画の中にある

三歳と八十歳のしやぼん玉
牛蛙啼く日常にして非日常

田安門風のかたちに舞ふ桜
船橋 藤原明美

六義園さくらひとひら水に透け
さくらさくら母と渡りし千鳥橋

花御堂風軽やかに伸びやかに
天心の碑に夕映えと貝寄風と

天心の碑に夕映えと貝寄風と